

苦悩するキューバ農業

キューバ有機農業信奉者には、なんだ？ また、ためにする批判か？としか映らないでしょうか。なにしろ、「ソ連崩壊を契機に国中を有機農業に転換し、スペシャル・ピリオド(特別期間)を食料の自給で乗り切った国」なのでしょうから。「キューバ農業は、世界が手本にするわけ」のはずですが。

今月14日付のキューバ青年共産同盟(UJC)の機関紙、『フベントウ・レベルデ』に、「統計では？ 良い。経済は？ もっと生産が必要」という辛辣かつ徹底した分析が掲載されています。同紙によると、2011年上半期、農牧畜生産は、6.1%増大しました。しかし拍手するのはやめようと言います。といますのは、農産物及び肉類生産は、7.8%増加しましたが、販売額は5.7%減少、販売量は13.6%減少し、販売価格は、6%上昇したからです。この結果に、レネ・タマヨ記者は、「経済政策は進んでいるが、成果は上がっていない、期待されたものにも、必要なものともなっていない」と指摘しています。

こうした中で、配給用に「予期せぬ」輸入を行わなければならなくなり、先の国会で、アデル・イスキエルド経済・計画相は、豚肉、牛乳、豆類の「予期せぬ」輸入に数千万ドル割かなければならなかったと報告しています。さらにラウル議長は、国会で、「国際的な食料の値上がりで3億ドル余、輸入額が増大した。食料を毎年15億ドル以上(輸入額の20%程度)輸入しており、食料の80%を輸入に頼っている」と現状を批判し、食料増産が焦眉の急であると指摘しました。

生産が増加したのに、販売が減少し、価格は上がったという、矛盾した現象がなぜ起きたのでしょうか。それは、キューバの農産物の流通構造から来ています。生産者は、まず政府との引き渡し契約を優先し(70%程度)、その後自家消費分を保留し、後を市場に回します。実際、上半期、根菜類と野菜類は、169万1300トン収穫されましたが、農産物市場では247,200トン(14.6%)しか、販売されていません。しかも、政府への引き渡し価格は、市場価格よりもかなり低い水準で、生産者の生産意欲を奨励するものではありません。



同紙は、指摘します。農業生産が順調にいつているといえるのは、①配給される食料の国産代替が進んでいる、②農産物市場での供給が増加している、③それにより価格が安定するか下がっている、という3つの条件が満たされなければなりません。それからすると、輸入は増大し、市場での供給は5.7%減少し、価格は7.8%上昇したのですから、農業生産は順調とは言えないのです。タマヨ記者は、「統計は食べられない」と厳しく述べていま

す。

そして、結論として、「統計では良い。経済はもっと一はるかにもっと一生産が必要とし、食卓では根菜類はほとんど変わらず、肉はより少なく、お金が、多くかかっている」と現状を総括しています。



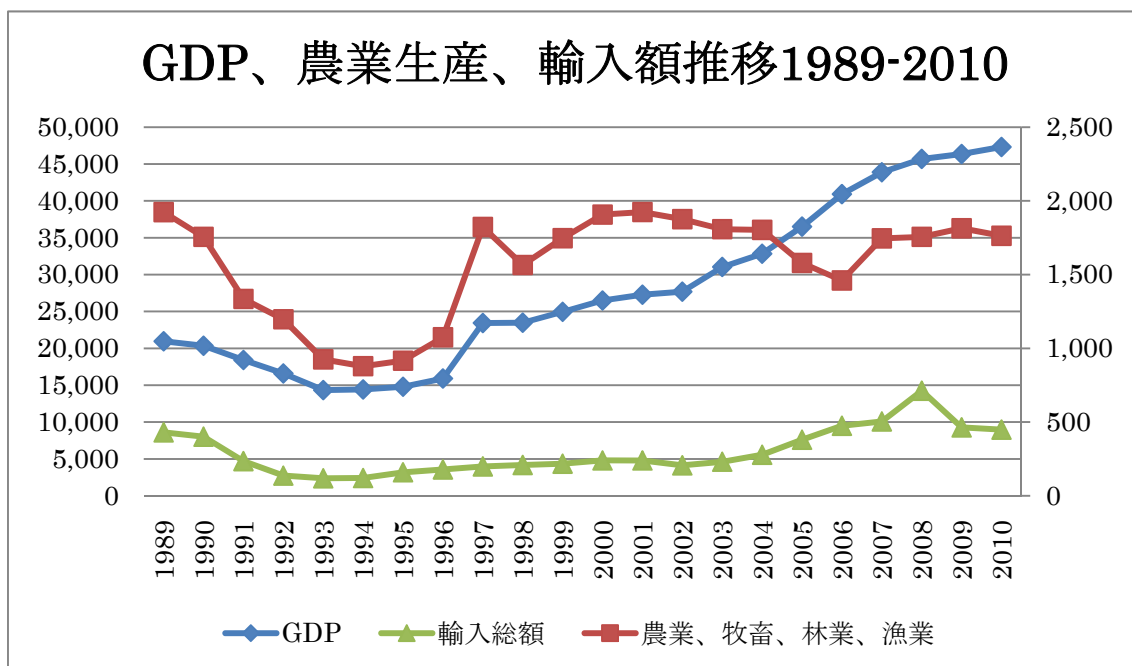
←農産物自由市場

この記事に、キューバ人読者の反応は、いずれも「素晴らしい分析だ、統計ではお腹が一杯にならない、自営農は、より少ない資材で国营農場よりも生産を上げている。自営農の育成に期待をしている」という意見です。

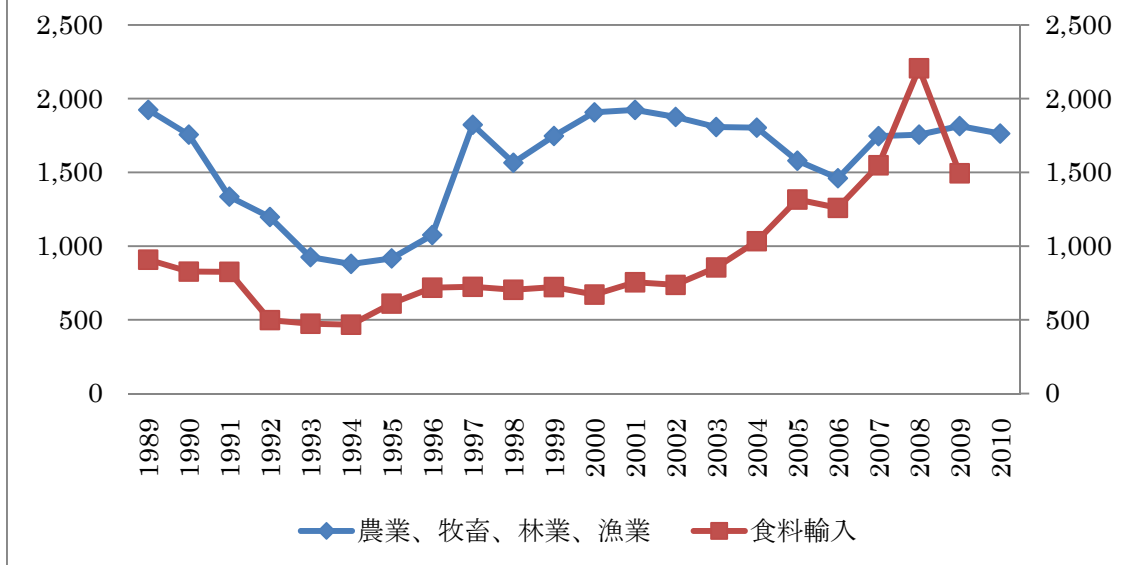
なお、この記事の中でも、読者の投稿欄でも、有機農業のことはひとことも語られていません。さて、日本のキューバ有機農業信奉者の方々は、どういう意見をお持ちでしょうか。もっと有機農業を増やさないからだめだとでも？ でも有機農業で自給体制を築いたのでは？『フベントゥ・レベルデ』紙は、外国人の投稿も掲載します。英語でも良いですから、自説を送ってみてはいかがでしょうか。

internac@juventudrebelde.cu

筆者は、3年前、同紙で、二人の物理学者が、ハリケーンと原爆の威力を比較して、ハリケーンの被害の大きさを述べていましたが、その二つは比較できないと批判した記事を送りました。それは、98年10月4日付で無修正で掲載されたことがあります。



農業生産と食料輸入推移1989-2010



(2011年8月15日 新藤通弘)